

〈前書き〉

この作品は、十月（まだ作者が創作にバリバリ打ち込んでいた時期）に書いたものです。今まで書いていた短編と世界観を共有しています。『アゼリアの匂い』『舞踏会』『悪人』『多才な子供』

結局、様々な要因が重なって続編は書いておりません。また続編を書く予定も今のところありません。本文が長い上に、固有名詞も滅茶苦茶多いので、少しでも快適に読めるように固有名詞の解説を付しておきます。

〈固有名詞〉

・原田（アンブロシウス）

十七歳 通称ブロージョ。主人公。

・プロクルステス（紫の魔術師）

魔術都市ヴィーレンの学長。

約二千二百歳

・ノータ（イヴリン）

原田の中に入り込む。

月の民。

・ヴァイ・ヴァスヴァット

魔法使いの祖の一人。

太陽と月と契約をする。

導師の学舎を創始。

導師の学舎は内なる学舎の前身。

弟子はナクシャトラとシユマウルス。

・月の王冠ダリウス二世（ダラヤヴァウシユ

師匠はナクシャトラ。弟子はノータ。

月輪学派（内なる学舎）を創始。

内なる学舎は魔術学園ヴィーレンの前身。

・大アンブロシウス（ヨサファット・アンブロシウス）

太陽以外の恒星と契約。

弟子はとらなかつた。

・惑星アルテロー

異世界の地球の名称。この話の舞台。

・魔法

過去の産物。今は廃れて、惑星アルテローで生まれ育ったものには使えない。

・魔術

魔法の下位互換。

・キャラクター名を古い順に整理すると、

← ヴァイ・ヴァスヴァットと大アンブロシウス

← 源流魔術師シユマウルスとナクシャトラ

← ノイゲバウアーとダリウス二世

← プロクルステスとノータ

← 原田 となります。

星辰のニルヴァーナ

ユキアネサ

# 一、

——異世界転移して五分も経たない内に、僕は死の宣告を受けた。

◇

原田は引きはがすようにして布団から体を持ち上げる。晩秋の涼しい夕方。リビングにある古いテレビから音が聞こえている。

「……本日、十一月八日は月蝕です。快晴が続く関東では観測できる可能性が高いでしょう。次に観測できるのは十八年後で……」

——十八年後つていうと三十五歳か。僕は何者になって、何をしてるんだろう。社会人かな、きつと。

漠然とした未来に思いを巡らせる。

彼は朦朧とした意識のまま玄関を開け、踏まれ慣れた靴のかかとを今日も踏んだ。スマホを入れたかポッケを叩いて確認すると、急な日光に視界が一瞬ぼやけながらもヨロヨロと散歩を始める。

クセ毛で、無気力な顔をしている痩せ型の青年だ。背は一七〇ほどありそうだが、猫背なため実際より低く見られがち。服はよくある半そでと短パン。柄が派手なので海辺で遊んだ帰りのように見えた。

「十八年後の僕。幸せですか？」

嘲笑を込めて言ったが、その文章は舌の上でフワフワと手ごたえ無く霞み、彼はぼんやりとした不安を味わっただけだった。

幸せな訳がない。人口は減って行くし、給料は下がる一方なのだから。家族だつて面倒だ。彼が学校に行かなくなった事に対して、祖父は精神が弱いせいだの一点張り。母は——共感してくれるので、祖父とは違うが——祖父の前ではいつも従っている。父はいない。いや正確に言うと、居なくなつた。彼が小六の時だ。県外で他の女とくつついたらしい。女さえいなければ、悪魔め、と当時の彼は思った。誰かに裏切られたり、奪われたりするということを如実に知っていた。

赤信号を見て立ち止まる。一面に広がる田園は夕方の静けさにひっそりしていた。この平坦な土地のずっと先に、塀で囲つてある一軒家がいくつも見える。更に向こうに見える山々は、立ち込めたモヤによって山体を隠されていた。その上には、夕方のよどんだ光の中に悪魔の体色のように赤くただれて雲が浮かんでいる。

——僕だつて、テレビとかSNSで見ると普通の暮らしがしたい。普通の生活をして、受けて当然の幸せが欲しい。

——生きていいことなんて無かつたよ。……いや、これは言い過ぎた。小さな幸せはいくつかあった。あと、僕がもつと幸せを見つけた努力をするべきだつたかも。しかしこれまでの人生、仮に幸福と不幸の合計を天秤にかけるなら重いのは後者だろう。

「ブオーン！」

大きなクラクション音で原田は我に返る。いつの間にか公道の真ん中を歩いていたらしい。貨物用の大型トラックが迫る。逃げなきゃ。でも生き延びて何をするの？

何も変わりはない。なるべく人目の付かない場所に陣取つて、食事は手早く済まし、みんな寝静まる間、深い闇の中でユーチューブを見て時間を潰す。そうして地獄みたいな夜明けを見て布団に入るだけ。いつから人生の歯車は狂ってしまったのか。

——この辛い世界を共に生き、いつも肯定してくれる仲間が欲しいと思つたつて罰当たりじゃないだろう。

彼は、そう、引きこもりなのだ。

「ブオーン！」

もうすぐそこまで来ている。間に合わない——。

次の瞬間、彼の身体は宙へ浮いていた。

しかし痛さはない。彼の足が独りでに動き、彼の命を現世に繋ぎ止めた。

無限に引き延ばされた、田んぼに落ちるまでの時間の中で彼は思う。

——ああ、そんなに生きて何がしたいんだ、僕は。田んぼに水が溜まつてる……。このまま落ちて服を汚して、母親に怒られて、祖父からは関係のない嫌味な小言を言われるんだろうなあ。

辺りが暗くなっている。トラックが通り過ぎると共に、その後ろから月蝕が見えて田んぼに映る。赤い、禍々しい月面をこちらにひけらかして。彼はそこへ、吸い寄せられるように落ちる寸前、目を瞑つた。

ポチャン——

思ったよりも水溜りが深いと思つたのも束の間、目を開けると、そこは戦場だった――

## 二、

空を飛ぶ、白い神殿のような飛竜。地を揺るがす咆哮をあげる度に、口の中に三本の舌の炎が見える。そこから地の果てまで届く勢いで、豪炎が地上を薙ぎ払う。

その炎のさなか、火に飛び入る羽虫さながら、手前に見える塔の胸きょうしゅうから巨大なバリスタの矢が解き放たれたが、かすりもせず夜空に消えるだけだった。

「えー、何これ――」

周りには魔法と剣の応戦、戦場の轟、降り注ぐ流星群と大地には無数のクレーター。あまりの衝撃に文章を形成できない。しかし現実である。転移先が安全圏とは限らないものだ。原田は、ありつたけの転移モノの知識で行動マニュアルを探そうとしたが、彼の頭にそんなものは無かった。

遠方の細長い塔から一人の魔術師が現れた。全身を包む深い紫のローブを着て、その上に赤い布を羽織っている。布の端には天球儀を模した刺繍。双蛇が巻き付いている杖を取り出すと、何かに祈るように口ずさみつつ高く杖を掲げた。すると彼の頭上の空間が裂けそこから星雲が見えたのも束の間、出現した数多の光矢は飛竜を追跡し――遂に撃ち落とした。

「うわー、すごい。魔法かなあ」

あつげにとられている間、重大なことを見落としていた。飛竜がこちらに落ちてきている。何処へ逃げるべきか分からないが。

「……っ！」

このままでは下敷きになってしまうことだけは分かった。彼は、必死に身体に命令した。

――逃げる！ 逃げなきや！

普段、運動しないことをこれ程悔いたことはないだろう。

隕石のようにこちらへ迫る白い飛竜。彼は力を振り絞り必死にダイブ。結果、翼の端ギリギリに躲せたが、墜落の風圧に吹き飛ばされた。砂埃と土が爆発のように散布する。

――こんな短期間に二回も宙に浮くなんて、僕はなんて運星が悪いだろう。

その時、頭と背中に激痛が走った。近くの樹木にぶつかり、枝を折りながら彼は落ちていく。

なんとか立ち上がり。

――とにかくここから離れなきや。

もたつきながら必死に走った。寒気が入り込んで喉が痛い。取り込む息は肺を凍えさせる。斜面に気が付かず転んでいった先は、ひときわ大きなクレーターだった。その中心に何かが見える。

楚々として白く、寒月のような肌。長すぎるウルフカットの巻毛は腰にまで掛かっている。畢竟、そこにいたのは月光に身を包んだ裸の女性だった。

女は原田に気付くと、這うようにこちらへ向かい始めた。けがをしているのか、その足取りは遅く、すぐに振り切れそうだった。が、彼の足は動かない。棒きれ同然

だった。すくんでしまったのだ、後方から聞こえる飛竜の咆哮を聞いて。

女が徐々に近づいてくる。心臓が凍えて生きた心地がしない。

——逃げなきゃ、逃げなきゃ！

身体がこわばって動かない。女が右手を伸ばしてくる。生命を鷲掴みにするその手を。

彼は両手の甲を眉間の前にかざし、もがくように手で顔を隠した。死を覚悟し、気持ち悪い汗で背中がべたつく。けれども。

「君、そのままじゃ死んじゃうよ」

——え？

「マナを取り込む回路がないから」

女は氷柱のように鋭い視線をこちらに向ける。目の下がほんのりと赤い。

「ぼ、僕を殺さないのか？」

「あー、普段ならそうするかもね。でも今は……。そう、オレはもう長くはないんだ」

そう言って伸ばした右手は、その長く尖った爪先から灰のように肘まで崩れて行つた。それを見て忌々しそうに言う。

「この有様だ。そして君も長くはない。だけどオレには『回路』があるし、君を延命させることだってできる」

「何が言いたいん——」

「その体、オレによこしな」

——はい?? え??

「オレに委ねろって言うてんだ」

「何を急に——」

「いいから決めろ！」

華奢な体から発せられる音とは思えないほどの怒号。

「このまま何者にもなれずに死んでいくのか、まだ始まつてすらない君の人生を再開するのか！ 前の世界が不満だったんだろ。ここに一からやり直すチャンスがあるんだ、さあ！」

女は崩れた右手を彼に差し出す。まだ崩れは続いていった。女は苦々しい顔をして、下唇を噛んで焦りを殺す。

「なんで僕のこと——」

『対侵入魔法』を使つてないからだ、つてそんなことはどうでもいい。時間がないんだよ、君もオレも！ 後ろからワイバーンだつて来てる！」

——嫌だ、分からない、苦しい。

彼は怖くなって目を瞑る。

——なんで僕ばかりこんな目に。

夕暮れ時の教室が頭に浮かぶ。居残りの時みたいな閑散さ。窓から差し込む憂鬱な夕日と、哀愁漂うカラスの声。原田は一人で座っている。辛く、そして退屈な日々。

目の前にいるのはあの女だ。このまま死ぬか、オレに触れて第二の生を送るか選べ、と叫んでいる。

——急すぎて、何がなんだか分からないよ。

異世界に来てから衝撃の連続で思考がまとまらない。

——そりゃ、前の暮らしに戻るの嫌だけど、ここだつて良い所か分からないし。

少ない情報量で、判断材料を集める。

——第二の生だつて、幸せに送れる保証はない。さつき戦争に遇つたばっかりだし。

異世界に対する幻想が崩れる。ハッピーライフという淡い期待が蒸発する。

——目の前の女だつて……。信用できるの……。？ 女は悪魔だつてあの時、悟つたじゃないか……。

叫んでいる女に対し、原田は意識を向けられないようにする。すると声が靄のように遠ざかる。厚い水膜にでも隔てられたようだ。

周囲には教室のいろんな設備が見える。過去の理不尽な記憶が蘇つた。

——僕は何も出来なかつた。打ちのめされた人生だつた。それがやり直せるとすれば……??

その期待の強さだけは、人よりあるつもりだ。

——やっぱりまた辛い目に遇うの??

不安が邪魔をする。結局こうなるのだ。彼は最後の決断ができないのだから。

——そしたら、僕は今度こそ壊れてしまう……。

嗚呼、共に歩む仲間という保証があれば。人生を分かち合うことができたら。

「できるよ!!」

下を向く彼の視界に入ったのは女の手。眼前の靄が一斉に裂け、光に包まれた。明瞭に響く声は空気を突き抜け、心と骨を振動させる。その最も深いところで。

「世界が苦しいかどうかなんて今悩むな！ 目の前のごとに集中しろ。オレも君もまだ生きてるんだ。一緒に生き抜いてから、苦楽を判断すればいいじゃないか！」

目の前の強い言葉で囁いてくる人物。正体不明の、微塵も信頼できない裸体の女が持ち掛ける、突飛すぎる提案。そんなもの承諾しない方がいいことは明らかだ。

「オレと、この世界を見定める旅をしよう！」

だが、この女しか命を救えないのも事実で。

だから、彼がした決断は――

「生きたい！ 僕は、もう一度挑戦したい！」

だって、世界への期待を捨てきれないのだから。

降りしきる流星群を背後に、薄茶色と、深青色の瞳がお互いを引き寄せる何かを探るようにつめ合っていた。運命の引力か、はたまた星の意志か。

すがるように原田は右手を前方へ伸ばす。女はまだ崩れていない左手を。ぺたんと地面に腰を下ろしたまま、二人の手が重なる。

その刹那、女は薄く笑った。

### 三

二人の手が触れ合う。瞬間、女の身体が光に包まれ原田の中へ融け込む。不思議で、はつきりしない感覚に包まれた。まるで身体が自分のものではないかのような。自分の心と体の間に、他人が入り込んでいるような。

『ツチ、あいつらボカボカ打ちすぎだ。いいか、魔法はこうやって使うんだ』

頭の中で声が聞こえると同時に、その声は一語一語噛み締めるように言葉を紡ぎ始めた。

Witness me, you ugly moon  
My Magister, the Moon Crown  
I order you upon that title

It is the very time when you must fulfill the protocol  
Cause your blood belongs to him every last drop of it  
Your blaze shall purify earthy smut  
Moon, s orbit begat luminous dragon  
Instrumental case and the highest moon  
alias Leaux Anluguen

(月よ、我が言明を見届け給え  
我が師、ダリウス二世  
その御名において命じる  
今こそ契約を果たす時

汝の血は総て彼のものであるが故に

白炎により地上の罪穢ざいせいを潔斎けっさいせよ

白道より生まれし皓月こうげつの竜よ

汝、月天心を具えし者、

ラー・アムルーグエン(=)

突如、眼前に竜が現れる。白く、小山ほどありそうな体躯。その四肢は大地を踏みしだき、その爪は巨礫を容易く砕く。月暈げつぐんのように柔和な羽毛に覆われた白竜は、首を垂れている。

こと魔法に関しては余りある引きこもりの時間のおかげで、多くの知識だけはあったが、実際に体験するのは初めてだった。

何かに操られているように原田の体が飛び乗ると、白竜は上空目指して一気に上昇。そして獲物を狙う鷹のように先の飛竜めがけて急降下し、その首根ごと体を押しさえつけた。爪足で首を強く握ると、白竜はそのまま飛び立ち、十分な高度まで戻る。

原田は背をかがめて、羽毛をしっかりと掴み、振り落とされないようにする。

次の瞬間、滑空体勢を取りその飛竜を高くそびえる石塔に頭から叩きつけた。飛竜は息絶え、頭だけが塔に刺さったままぶら下がっている。

それを見届けると白竜は魔法の矢のように空を飛び回り、白炎で地上を一掃する。それは鉄砲水のように木々や人々を掃う。

原田は眼前の光景が信じられなかった。

羽毛が温かく彼を包む、風を切る音がうるさい。暗天が、大地が、大気が振動している。

ある程度薙ぎ払うと、白竜は舞い降りた。原田は地上

に降り立つと拳をわなわな震わせながら、ただ下を向いていた。

『今、一体何をしたんだ？』

『何って、召喚魔法を使っただけだが』女が怪訝そうに答える。

『それって……それって……』

湧き上がってくる感情が興奮か、好奇心なのか分からないが。

『すごい！ すごいよ！』

彼にとつてあの光景は圧倒されるほど美しいものだった。

『何も無いところから竜を呼び出して、こう飛び乗って、ビューって空を翔けて、ゴゴゴって炎を吐いたんだよ』

!! 夢みたいだ！』

魔法は、彼にとつて余りにも美しく見えた。

女は、こいつは何を言ってるんだという顔をして立っていたが、やがてこみ上げてくるように笑い出した。

『アハハ！ 君面白いね。魔法を見てそんなこと言う奴は初めてだよ。いいぞ、もっと褒めてくれよ』きめ細かな白い腕を自信ありげに組みながら言う。

白竜は役目を終えたのか、白い霧のように蒸発して消えていった。

『あ、待ってよ！ まだ消えないで！』

原田は白竜がいたところへ駆け寄る。

『お、オイ、あんまり近寄らないほうが……』

そうして白竜の足跡に顔を近づけると、匂いを嗅いで満足そうな顔をしたり、顔を地面に擦り付けたりした。

『うわっ！ キモっ！』女が端正な顔が引き攣る。「前言撤回、こいつは変人だ……」と先の認識を改めているのだろう。

『おい、やめる。もうお前だけの体じゃない。オレも入ってるんだ。だからみつともない行為は——』

『君は一体……?!』

原田は荒声で遮り、胸を波立たせながら聞く。

『あー、うん、そうだよな。気になるよな……』

女は決意したように小さく一度頷いてまた言う。

『オレは敵だよ、この街を破壊しに来た』

その時、突如視界が暗闇に包まれた。

## 四、

薄暗く衛生環境の悪い正方形の部屋。目の前の漆喰は剥がれており古びた石壁が顔を出している。部屋の正面は鉄棒に閉ざされており廊下から薄暗い光が入ってきていた。部屋の床下は……見るのも憚られるほど汚い。体全体にゴワゴワとした感触を感じる。見ると、汚いポロ布を着ていた。

原田はため息をついて目を閉じる。すると辺り一面が湖の表面のようになる。削られた銀の表面みたく、凹凸の角度に応じて様々な光を発していた。空には一面に薄紫の霧が立ち込めている。

少し遠くにあの女の姿が見えた。

「それで、なんで僕たちは牢屋にいるんだ？」

「捕まっちゃった♡」女は許してほしそうに、華奢な体をくねらせる。筋肉質で細い体だ。小さい肩は更に縮こまり、白い肌は新雪のようだ。普通の男なら許してしまいたいような妖艶さだが、相手が悪かった。こと女性に関して、原田の判断は厳しかった。女性であるというだけで彼の中では減点対象だ。

原田が不機嫌な理由はもう一つあった。自分の体内に他人がいるという気持ち悪さ、不安。それが得体の知れない者なら尚更だ。素性を暴きたいと思うのは当然だろう。あの時は状況が状況だったのでそこまで気が回らなかったが、冷静になると様々な疑念が湧き起こる。女の名前は、正体は？ なぜ魔法が使えるのか？

原田が頬に手を添えて考え込んでいるのを見て、女は訳知り顔で近づいてきた。

「ほほう。まあ、疑問が出るのは当然だよね」

「え？ 何急に？」  
「いやあ、君の考えていることはほほオレに筒抜けだから」

女は背をかかめて上目遣いで言う。光の加減で長い上睫毛がよく見える。

「はあ!!」

なんとという恥辱。まだ変なことを考えていなかっただけ心理的ダメージは少ないのかもしれない。

しかし、おかしい。あつちは分かるのに僕はあいつの考えが読めないぞ、と思った瞬間、女が口を開いた。

「それはオレが『対侵入魔法』を使ってるからね。読み取りなかったら、魔法を勉強するしかないよ」

真つすぐ立った女は、原田より背が高いので見下ろしながら言った。八重歯を見せるようにして笑っている。

魔法と聞いて原田はさつき見た召喚魔法を思い出した。そこで聞くべきことをリストアップしたのだろう。少し興奮さみに話しかける。

「君の名前は？」

「うーん、そうだね。じゃあノートで」

「何、『じゃあ』って。今決めたみたいじゃないか」

「細かいことはいいから。ハイ、次の質問どうぞ」

掴みどころのない女だ、と疑念を募らせながら質問を続ける。

「(こ)は(ど)い(ろ)？」

「(こ)こって？ 牢屋のこと、それとも君とオレが今いるところ？」

「(こ)こ」 本当は分かっているくせにと少しイラついて言う。

「敢えて言うなら、君の精神世界かな。心象風景とも精神界とも言う。好きなように呼ばばいい……それにして

も、つまらない風景だねえ、君の心は。はじめて他人に入ったけど、もつと味わい深いと勝手に期待してたよ」  
ノートはどこか含みのある色を瞳ににじませ、顎に手を当てた。

「君、過去に相当嫌なことがあっただろ。じゃなきゃこんな殺風景にはならない」

「うるさいな。ほっといてくれ。それで……」

原田は苛立たしそうにノータを一瞥する。依然、裸体だがどこか変だ。見間違いでなければ、髪が短くなっている。

「君——」

「ああ、髪のことね」

原田が言い切る前にノータが察する。相手に考えが筒抜けなのは、便利だがやはり慣れない。

ノータは強く髪をかき上げると、ぱつと顔を輝かせて言う。

「そうだ！ やってみたいことがあるんだ」

そう言うって、どこからともなく現れたカーテンの裏に隠れたので、ゴソゴソと動く影だけが見えた。もう裸を見ていし今更隠す必要ないだろ、と思っっているノータが勢いよくカーテンを引っ張った。そして再登場した時には。

「じゃーん!!」

服を着ていた。首元の開いた赤いワイシャツにゆるい黒のネクタイ。肩に黒いジャケットを羽織っている。刈り上げられた白いショートヘアは耳の上半分を隠し、雪待月のような頬を露わにする。その輪郭のはっきりした顔立ちは、どの角度から見てもキリっとして美しい。

ポケットに手をつ込み重心を傾けながら立っているが、その姿はアイシャドウで赤みを帯びた瞼、長い睫毛、

端正な鼻と相まって、美形だがどこか悪魔的な印象を与えた。

「どうよ!!」と言っはいるが、ポーズを取るのに夢中で原田には見向きもしない。本当に意見を求めているのではなく、自慢したいだけなのは明らかだ。そうしてノータはまたカーテンの裏に隠れた。原田は魂が出そうなほど大きなため息をつく、その場にあぐらをかき頬杖をついた。

次にノータが現れた時、今度は露出の多い服を着ていた。髪型はマッシュで黒に染められている。前はパツツンで、後ろから横に行くにつれて髪は少しずつ長くなり緩やかな弧を描く。頭を動かす度に黒髪がなぞる柔らかな輪郭が光に反射して映える。そして憂いを帯びた目をこちらに向けている。役に入りきっているのだろう。それにしても、スカートとストッキングの間に見える太ももは刺激が強すぎるのではないか。そう思った瞬間、ノータは瞳を柔和に細め、ニヤリと口端を吊り上げた。

「君、むつりだろ」

「つ……!! うるせえよ」

咄嗟のことで上手い返しが出来なかった。本心がバレてなければいいと思っしたが、相手がニヤニヤと悪意を凝縮した笑みを浮かべているのを見るに気持ちは全てお見通しなのだろう。

「ねえ、いつまで一人で試着会やってるの。よくそんなにいるんな服着れるよね」

するとノータは口を尖らせながら言った。

「せっかく他人の記憶から服を選べるんだからもうちょっと楽ませてよ。お気に入りの服が見つかるまで待ってなくてもいいじゃん」

「もしかしてこれ全部僕の記憶から持ち出したのか!!」

「そうだよ。君は興味なかったかもしれないけど、ちやんと記憶には残ってるね。で、君の記憶をオレの認識に合わせる。世界の解像度ってやつ。君は言葉を知らないだけで実はいろんなものを見る。しっかし面白いね。君の世界ではこんな服を着るんだ」

「初めて着るにしてはセンスが良すぎるだろ……」

原田の言葉をよそにまたカーテンの向こう側で服を選び始めたのを見て、彼はこめかみを抑えながら言った。「あと何回着るんですか？ ていうか何で僕の記憶から服を着れるの?」

「それはね、今のオレ達が『アストラル体』だから」

そう言ってノータはまたカーテンを引いた。今度は豊かなボブカットにロリータケープの組み合わせだ。どうやらこれが気に入ったようで、ケープの裾を持ちながらクルクルと恒星のように自転している。

「アストラル体って何さ?」

彼女のファッションをひたすら無視して聞く。

「そんなことも知らないのか。愚かだねえ」

ノータは鏡を見て服装を微調整しながら詳しく説明を行った。曰く、この世界は五元素で構成されている、と。すなわち火、土、水、空気、星気。空気と星気はほぼ同じだが、その違いは過去の魔法使いの認識に由来する。地上において常に落下する物体と天の落ちぬ星々を見て昔の人は思った。宇宙は、地上の空気とは違うエネルギーに満ちているに違いない。そのエネルギーを空気と区別してこう呼んだ。星気と。そして、その星気に自己の意識を乗せて形成する個我をアストラル体と呼ぶ。あの対侵入魔法も星気について学べば突破できるようになるらしい。

「理解できたかい? フール」

ノータがにんまりと笑顔を向ける。悪魔の嘲笑だ。

「ああ……まあ。それで、君は一体何者なんだ……?」

服装決めに満足したのか、それからノータは多くの事を語った。彼女は命令されてここに来たこと。本名では不都合だから偽名でノータと名乗ったということ。侵入する際に、紫のローブを着た魔術師に攻撃され、空中で崩壊してしまったということ。体の欠片はこの大陸のどこかに落ちていったらしい。欠片を全て集めない限り、身体から出ていかないぞという脅し文句もあった。

しかしこれらは、彼女のとった行動を十分に説明してはいなかった。敵だというのなら、どうしてあの時飛竜を倒したのか。なぜ、身体を手に入れてすぐに殲滅を行わなかったのか。

「だって、あいつらに従うのが癪なんだもん」

思っていたより単純な理由だった。

『あいつら』が誰かは分からないが、ノータの心底嫌そうな表情を見るに良い関係性ではないのだろう。

「あいつらには逆らえないけど、今のオレは死んだことになってるだろうから……。その間にいろいろ見ておきたい。それに興味があるんだ。この星に。魔法とそれを教える学園に」

彼女の言葉にはどこか決意じみた響きがあった。彼女は、欠片を集めるよりも学園を見ることを優先しているように見える。自分のことよりも学園への関心が大事なのだろう。

「で、オレ達がいるところがまさにその学園なのさ」ニヤリと口角を上げながら言う。

「いや、どう見ても牢獄だけ……」

「うん。だから学園の地下牢獄にいてること」

ノータはきびきびとした動きで顔を寄せた。鼻腔をくすぐる甘い匂いは彼女が纏っているものだろうか。原田は頬が上気するのを感じた。この反応を認めたくないのか、早く消したいのか、気を紛らわすように両手で地面を強く掴んでから勢いよく立ち上がった。ノータは少し後ずさり二人の間に距離ができる。

「それで、僕はなんで捕まったんだ?」

「それはね、君のせいだよ」

「は?」

「だって君が軟弱すぎるんだもん」

「いやいやいや、人の体を借りておいてドンパチした拳句、僕のせいだって言うのか。自分勝手にもほどがあるぞ」

原田は険しい表情を向けるが、相手はにんまりと口端を吊り上げている。それから妙に芝居掛かった様子で語りはじめた。

「確かに、オレの不注意のせいもある。召喚魔法を使っただ後にまさか君が丸一日も気絶するなんて思ってた。でもそれ以上に君の体は貧弱すぎる。魔法への耐性がないのはしょうがないとして、何、この覇気のない体は?」

「確かに」という言葉は譲歩するために使うのだろうが、どうもそうは聞こえない。譲歩という名の刃である。泣くふりをしながら女は続ける。

「嘘……?! 私の体、筋肉なさすぎ!! 骸骨みたいに腕は細いし、足も小枝みたい……」

「うるさいなあ」

「ひげ面だし」

「別にいいだろ」

「脂肪も筋肉も少ないから地面に座ると痛い! お尻の



皮が薄いんじゃないの？ あと一物だつて——」  
「ああああああ!!」

原田は必死になつて遮る。全て相手に知られているというこの状況の残酷さが分かつてきた。

「んん！」 散々弄つて満足したのか、咳払いと共に彼女は背筋を伸ばし、両手を腰に当てる。

「とにかく！ オレはこの新世界を見定めに来た！ 周りも他人も関係ない。そんなクズ共に左右されず、オレは、オレの望むやり方で、この世界を満喫する。だつてやつと手に入れた新世界だから。その過程で生かすべきか、滅ぼすべきか判断しようと思う。そして一つ断言できることがあるぞ！」 ノータはウインクをするが、それにしてはいささか元気が良すぎる。

「君がむつりだということだ」

「あーそーですかー」

一旦整理するなら、彼らの当面の目標は学園で過ごしながら、欠片のありかを探すことになるだろうか。まずはなんとか牢獄から出なければならぬ。

「あ、そういえばさあ、まだ『回路同期』してなかったね」 ノータが鼻息を荒くしながら言う。

「何……それは……？」

「生まれも性質も違う者が同じ体の中にいるんだ。だからいろいろ調整しなくちゃいけないんだよ」

「そう……で、それはどうやって行ふの？」

「まぐわいだよ、フルル♡」

原田の鼓動が急激に上がるのをノータは感じた。

## 五、

ノータが寄ってくる。原田はあくらの体勢から手を後ろに伸ばし逃げようとするが透明な壁に遮られた。壁に頭をぶつけると、その横にノータはドスンとブーツを突き立てる。ひえっ、と原田の情けない悲鳴が上がる。

彼はノータを見上げる。白い佳月のような喉がクツリと動くのが見える。彼女がはにかむような笑顔で目を閉じると、薄い赤に色付けされた瞼がよく見えた。鼓動が跳ね上がり、呼吸が荒くなる。

「嫌だ、嫌だ……悪魔にだけは汚されたくない……っ！」

星気の知識は相手のほうが多い。この場は彼女に主導権がある。逃げられる訳がない。そう思い始めた時。

「おい、出る」

鉄柵の外から声が聞こえた。緑のローブを着た恰幅の良い男が二人。看守だろうか。どちらも短い黒髪で、眉間にしわが寄って険しい顔をしている。一人は杖らしきもので周囲を照らし、もう一人は背中に剣を担いでいる。

「何をひとりでブツブツ言ってるんだ。気色悪い」

さつきとは別の男が言う。忌々しいとも言いたげに眉根が寄っている。どうやら相当嫌われてしまったようだ。

気弱そうな顔をして原田は従う。牢獄の外へ出ると後ろから杖と剣を突き付けられた。ゴクリと唾を飲み込み原田は指示されたまま歩き始める。こうまで警戒されるとかなり傷つくものだ。彼が気を失っている間にどんな

悪行をやらしたのか。本人に聞いてみることにした。

『なあ、お前何やったんだ。ていうか学園に入りたいたら、学園側に迷惑をかけないようにとか思わなかったのか。あれだけの魔法が使えるんだ。恩を売っておくべきだったと思うけど』

『ツチ……うっせえな』

鋭くこちらを睨みながら言う。強く絞られた声だ。かなり機嫌が悪いらしい。ノータは続ける。

『あの時はここがどこかも分かってなかった。だから目の前の仲間を倒すのに必死でいろいろ壊しちゃったんだよ』

『壊したって……』

原田は白竜を思い出した。そしてあいつが何をしたかも。

『もしかしてあの塔は学園の建物だったのか……!!』

『そうだよ。いちいち言うな。黙ってる』

怒気を含んだ声だ。

『はあ、完全に僕たちが悪いじゃないか』

原田は申し訳なさそうに眉尻を下げる。

『それでここがなんで学園だつて分かったんだ』

『あのレリーフが見えるだろ。あれは『空間神殿』の証だ。この学園は空間神殿の上に建てられたんだ』

イラついているのか説明は簡潔だった。『同期』とやらをさつき阻まれたからだろうか。まったく気分の変化が激しい女だ。まるで感情を知ったばかりみたいだ。

『そんなことも知ねえのか。異星のオレでも知ってるぜ。』

フルル  
阿呆が……そっか、オマエも異星——』

『逆になんで異星のお前が知ってるんだ?』

『ああ？ そりゃオレの師匠が——』

その時、看守の一人が話しかけてきた。手には石板プレートのようなものを持っている。

『お前、名は？』

そこで原田ははたと我に返る。そうだ、そういえばまだ名前がない、と。

『さすがに前の名前じゃ通用しないよな』

『アンブロシウスだ』

『……はい？』

『オレがこの星に入る時、『星の代行者』が言った。オレ以外にも入って来る者がいて、そいつの名前はアンブロシウスだって』

自分の知らないところで勝手に名前を付けられるのは変な感じだ、と思った。

『ていうか、転移モノによくある、異世界の女神様の存在にまだあつてないじゃないか！』

綺麗な女神様とイチャイチャするのが夢だったのに。

両手を上に突き立てもがいている原田を見て、ノートはため息をつきながら言う。

『お前が何を悔しがってるかは知らないが、星の支配者的な奴はいるぞ』

『そうなんだ……。なんか読み慣れた役割の存在がいると安心するよ』

訳が分からないことの連続なので、馴染みのある物事に少し安堵する。

『名前はカサイン』

『へえ。それでどうすれば会えるの？』

『会えない』

『……え!!』

『オレが封じた、邪魔だったから』

『は……？』

『侵略するのに邪魔だったから。封印魔法を使う寸前に伝言を頼まれた。それがさっきの名前だ。だから名前の由来は知らねえ』

『ええ……』

どうやら思っていた異世界とは少し違うらしい。とうか封印したって……。仮にも星の支配者なんだろう、易々と封印されるなよ。それかこの女が余程のやり手なのか。益々正体が気になる。

『あーあ、嫌な面思いだしまった』ノートが語気を荒げる。耳たぶまで震えそうな大声だ。

『あのカサインって奴はいけ好かねえ！ 今度遇ったら一発殴らせる。それかお前が代わりに殴っておけ！』  
はあ、と原田が反応に困っているとまた声が聞こえた。

『おい！ 名前は!!』看守が怒鳴る。

『あつ！ ……アンブロシウスです……』

咄嗟のことで声が上がらず。情けない声が薄暗い廊下に響くのは一寸の間で、その後また心地よい水滴の音や、緩やかに空気が流れる音が響いた。

『さつさと答えろよ。低脳が……』

看守の鋭い刃が心に刺さる。

『気にするな……。大丈夫。聞き流せばどうということはない』原田は自分に言い聞かせた。

その後も警備がいくつか質問しプレートに書き込んでいった。そのつぺんには柔らかい凍石の石筆で大きく

ウイットネガゼート

『魔術法廷 出廷資料 囚人番号 666』と書かれていた。

原田は、法廷に連れていかれる途中なのだ。

どこが出口かも分からないまま薄暗い廊下を歩く。両

脇の牢獄にはあの時遇った怪物たちがいた。大きさも形状も様々で、近くを通ると鉄柵に張り付いて牙をのぞかせる個体もいた。それでも体色が白ということだけは共通している。こいつらもノータの仲間なのだろうか。彼女は何も言わない。あ、そういえば、と重要なことを原田は思い出す。

『いろんなことが一気に起こりすぎて聞けなかったけど、結局僕の延命は成功したの??』

それを聞いてノートは苛立ちの捌け口を見つけたのか卑しい目をこちらに向ける。人を小馬鹿にした顔だった。その顔を見て何か嫌な予感がした。苦悶と絶望を宿した心臓にそつと歯を立てて、奥歯で押し潰すように味わい愉悅に浸る。そんな顔をしていた。

『ああ……それはね』

——やめろ、言うな。

『……嘘だよ』

——嗚呼。まただ。

『この世界にマナなんてない。あの時死にかけていたのはオレだけ。君は騙されたんだよ』

——やっつと、誰かを信じられると思ったのに。性悪のクソ女め。

## 六、

この世界は理不尽だ。

最初にそう思ったのはいつの頃だったか。

人の思いが初めて表面に現れ出る時は、そもそもかなり溜まった後だから、そう思った時には既に遅いのだろう。

要は、氷山の一角というやつだ。

先生が、自分がされて嫌なことは他人にもしないように、と自信ありげに言っていたのでそれに従い他人を見ないようにした。

なぜって人から見られるのが好きじゃないから。一方的に見定められているようで吐き気がする。なぜか……なぜだろう??

兎に角そうしていたら先生に怒られた。みんなの前で僕だけが。

——味方だと思っていたのに。

ちゃんとチームメンバーを見て応援しなさいって。

——嗚呼、この人達は言葉を悪戯に舌の上で転がして、その響きにふけっついているだけなんだ。

この世界は理不尽だ。

今度は中学生の頃だったか。

仲の良い女の子がいた。よく話してた、放課後とかに。

ある日急にその子が夢の話をしてきたんだ。

夢でよく僕のことを見るんだって。

ハグから始まって……、その後は——まあ分かるだ

ろ?

そういう話を聞かされて心底嫌悪した。

——これ以上僕を見ないでくれ! 醜態を暴かないでくれ!

以降その子を避けるようになった。

そしたら僕が悪者扱いされた。

「ちよつと、原田! あの子に謝りなさいよ」って言われて、変な女子グループに目を付けられたんだ。

きつとあいつは都合のいいように話を広げたんだろう。人の皮を被った悪魔だ。

——避けられたら悪口を広める程度の仲だったのだろう。恋人という皮を被って騙してたんだけ!

だから女は嫌いだ。

そういうことが積み重なって、学校が楽しいと思えなくなつたし、次第に足取りも重くなつた。

『……』

もちろん僕にも落ち度はあつたさ。

先生「味方だと期待しすぎていたのかも知れない。

そして好きな相手とまぐわう夢を見るなんて珍しいことじゃないのかも知れない……知らんけど。

僕の精神が普通でなかったことも認めるよ。

当時の僕は極端に他人の視線を恐れていた……それは今も変わらないかも知れない。

その理由は……もしかして父親のせいだろうか。いや、これは思い出したくない、辛すぎる。

『……』

とにかく、悲惨な過去だったんだ……。

それでも、今思えばもっと良いやり方があつたのかも。

でもさあ、当時の限界ってあるんだよ。

どんなに頑張ってもどうしようもない時が。

悔いの残つた過去を振り返ってもどうにもならないことは分かつてる。

でも、考えずにはいられない。

あの時あれが無かつたら、今頃もっと普通に過こせてたはず、と。

受けて当然と尊厳と愛情を貰えていたはず。

みんなはこういう気分の時どうしてるんだろう……。

結論、あの世界は理不尽だった。

だからあの時が嬉しかった。

ノータが誘ってくれた時が。

もう一度、人生をやり直せると本気で思った。

けど結局分かつたのは、僕が利用されたってこと。

ああ、なんであの女を信じてしまったんだ。

僕は命の危機には瀕していなかった。死に体だったのはあいつの方だ。奴は自分が生き延びる為に嘘をついた。

僕を延命できるなんて嘘を。その所為で牢獄に入れられ、出廷まで……。

——もういいよ。勝手にやってる。これ以上にあいつに

関わりたくない。

『……』

あの時、何が正しいかなんて判断できっこなかった。いくらノートが怪しくても、従うしかなかったのかも知れない。

結局、飛竜に殺されてたかもしれないのだから。十八の青年にしてはよくやった方だと思う。世界の何たるかも知らず、今まで引きこもってた僕だぞ。

まあ正直、牢獄のことも出廷のこともそんなに気にしてない。

だから、騙されたその後に大きな不満がある訳じゃない。今はまだね。

でも、どうしても許せないのは、騙されたという過去だ。

そして騙された自分という存在。

あの時……父に見捨てられた時、もう騙されないと誓ったのに、同じ目に遇う自分の不甲斐なさにも腹が立つ。

自分の首を絞めたい。絞め殺してやりたい。

——自己嫌悪に自己嫌悪を積み重ねて。人と関わりたくない。

——自分が簡単に傷つく弱い人間だと分かっているから。それか、全てを見通す千里眼が欲しい。

——何が起こるか分かれば傷つくこともないだろうから。何が魔法だ、星気だ、アストラル体だ。もうどうでもいい。

結局、どの世界にいても苦しい思いをするんだ。そういう星の下に生まれる脆弱な人間なんだ。

どうせ僕は。

世界を見定めるなんて、高尚すぎる目標だったんだ。

だから事あるごとに反芻する。

あの時、あの戦場で——。

いや……もう少し前だ。トラックに引かれそうになった、あの宵闇で。

ほら、あの時■■■■■ほうが良かったじゃん、と。

## 七、

牢獄を出て、長い回廊を過ぎると開けた場所に出た。楕円形の床一面はよく磨かれた石畳、中心にはポツンと鉄製の椅子。その床の半分を上から覆うように弧を描いている一つながりの傍聴席には多くの人が座っていた。

ほとんどが緋や滄のローブを着ているが、紫のを着ている人も何人かいる。魔術師だろうか。天井には大仰そうにアルミラ球儀が吊るされていた。その煌々とした光源の周りを黄径環や黄道環といった環っかが回っている。その環が光源を横切る度、場内に細長い影が走る。

「おい、あそこに座れ」看守の一人が言う。

アンブロシウスは指示通りに中心の椅子に座った。それまでは何事もなく雑談をしていた彼らが、一斉に沈黙し椅子の方を見る。視線を一気に感じ、胃の底がヒリヒリと痛んだ。嫌な記憶が蘇る。

——頼む。頼むからそんなに見ないでくれ。

不快で声が出そうになったが、厳粛な沈黙のため我慢せざるを得なかった。

傍聴席の中央に、一段と高い椅子が二つ見えた。左側は空席、右側には紫のローブ纏った老人。先ほどの看守からスレートを受け取ると、老人は眉間にしわを寄せつつ、声高らかに話し出した。

「我らが学園の起源、導師の学舎。その創始者にして魔法使いの祖、ヴァイ・ヴァスヴァットの御名の下に、これより判決を執り行う」

その老人は青年を忌々しげに一瞥して言った。

「議題は、この青年の処分である」

アンブロシウスはゴクリと唾を飲み込み、手に汗を握る。

◇ 今回の審理はいろいろと複雑だ。老人はそう思っていた。

まず、『月の民』による侵略。昨晩まで続いていたこの侵攻は月の周期からある程度予想されていたことだったが、戦力の量も質も想定以上だった。故に学園側は苦戦を強いられ、掃討に大きな手間がかかった。

次に、そうした状況下においての青年の出現。明らかに学園の学徒ではない。正体不明。回収した服は異国風。服の中には小型の携帯端末らしきものが入っていた。

以上の不確定要素、すなわち青年の闇に隠された実態に加え、彼が行った行動も不可解だ。戦場にいた学徒達が言うには、この青年はかの伝承に登場する皓月の竜を召喚した後、月の飛竜を撃破したかと思えば、敵味方問わず襲ったという。どちらの陣営に属しているかという謎もそうだが、それ以上に理解できないのは彼が使ったという魔法だ。

「召喚魔法だ?! 馬鹿な!!」報告を聞いた時老人はこう思った。『魔術』ではなく『魔法』なのだ。この事実がどれ程彼らを震え上がらせたであろうか。遠い昔、魔法と決別せざるを得なかったこの星において、魔法を使える者はほほえない。いるとしても、源流魔術師の一部や異星の民に限られる。

「この青年がそうだと言うのか。外見から判断するにまだ二十にも達していない。俄かには信じられない」獄内の気絶した青年を見てそう思った老人は、何かの見間違

いだとして青年を処分しようと考えていた。学園側の利益が最優先。不確定要素は排除。

こう考える一方で、惜しいという気持ちもあった。もし生徒達の証言が正しかったら。あの年で仮に魔法が使えるとしたら。これほどの逸材はいない。魔法は、魔術の数段上を行く、あらゆる面において。法理は常に術理の頂点である。まさに魔術の最高峰、エッセンスの結晶。すべての魔術師が渴望する本懐。

魔法が消えてしまったこの星において、魔法は紛れもない悲願である。魔術師達の宿願である。学園側の利益を真に最優先するならば、彼を殺さないほうが良い。利用すべきに決まっている。魔法は、魔術師の目的を果たすための最後のフラグメントなのだから。かのヴァイ・ヴァスヴァットの伝えた『人が円を見る時、星に出逢う』という目的のための。

老人は悩む。学園の為を思えば思うほど、残酷な天秤だ。……そして決断の時。

◇

「ワシは……この青年の死刑を提言する。これに賛成の者は？」  
老人のしわがれた声が楯田ホールに冷たく響いた。

## 八、

死刑。

それはアンブロシウスにとって救い。最後の安らぎである。

なぜか。

まず、常時続く心の不快、不安。

『そんなに大勢で僕を見ないでくれ。誰とも関わりたくないんだ。もう裏切られたくない』

それは心の傷付きやすさ故の苦悶である。

次に、そうした弱い自分を認めることができない。

『僕は、僕が嫌いだ。弱くて、傷つきやすい僕が、嫌いだ』

自分に対する高すぎる理想と、現実との乖離。

その結果、自分への失望。

加えて、父親に捨てられた過去が拍車をかける。

『僕の出来が良くなかったから捨てたの？ 嗚呼、僕に

もつと才気と能力があれば、良かったのに』

けれど、臆病な自尊心だけはいつまでも傲慢。

こうした気持ちと共に彼は生きてきた。何年も、何年も。

雪山の些細な揺れがやがて雪崩になるが如く、この懊悩は集積し、聚合し心に影を投げかける。大きな闇を形成する。

闇よ、おお闇よ！ 彼の世界は苦しみにまみれ、どうしようもなく塞がっている。心は常に緊張の縄で縛られている。

けれど、些かの後悔。死よりも魅力的なものがこの世界にないと言いつけるだろうか？ この世界に来てたつた二日足らずで？ そう断言できるほど、彼は本気で生きたのか。

この答への出ない問いに対し、あまりにもひどい吐き気をもたらす生の苦しみに対し、闇は唯一の解を与える。

それは忘れること！ 忘れること！  
生に向き合うことより、悩みも人生もすべて忘れたほうがよほどまだ。

おお！ 闇にすべての問題を解決させよ。あらゆる人の意志を打ち砕かせよ。凡そすべての思考を放棄させよ。『もっいいいよ。何も考えたくない。辛い。どこに行つたつて苦しいものは苦しい。さっさと殺してくれ』

それは死への誘い。

『僕は死んで転移した訳じゃない。だから死ねば、本当にこれつきりに出来るかも』

老人の死刑という提言に賛同する者がほとんどだった。苦渋の決断らしい様子をしている者。脳死で、ほほえみながらただ何の疑問も抱いていないように見える者もいた。

反対陣営は劣勢だった。最も近くに見えたのは、アンブロシウスから見て右の一段目だ。滄のローブを着て……

『賛成多数により、ここに死刑を宣告する！ 明日、神秘塔地下において執行する』

ドンドン、と老人は木槌で机を叩くと、手元の紙に封をし、封蝋に印章を押した。印章には、片腕に女の生首を持ち、もう片腕を振り上げる男の姿が彫られており、そのシルエットは封蝋に残酷なほどくつきりと残った。

老人の声音が空気を震わすと同時に、アンブロシウスが椅子にもたれ掛け、薄く笑みをこぼしたその時――

「ノン！」

自分の声が場内に響くのを聞いた。ノートだ。精神世界で、椅子の背を両手で抱えて反対向きに座っていた彼女は勢いよく飛び降りると、アンブロシウスの方へ歩いてきた。コツコツ、と彼女のブーツの音だけが響く。彼はただ三角座りをして俯いていた。

『もう辛いんだ。ほっといてくれ』

『そうか……』

『君が僕を騙したからこんなことになってるんだぞ』

彼は意志のこもっていない左腕を乱雑に振った。

『そうだな……』

『悪魔！ クソ女！ あっちへいけ！ 僕はあの時、本気でやり直せると思ったんだ。リセットしたかったんだよ、人生を』

『そうか、お前……本当は期待してるんだな、世界に。でも傷つのが怖い、失敗して無能が晒されるのが怖いんだろ』

ノータの唇が悪戯っぽく弧を描く。アンブロシウスは腕の裾で顔を拭くと、ノータを見上げた。彼の目の周りにはほんのりと赤く腫れている。

『ハッ！ それを踏まえても尚、どうでもいいな！』  
『うるさい！ 放っておいて言ってるだろ！ これは

僕の体だ。心も僕のものだ。さっさと出ていけ！』  
するとノータはコトリと小首を傾げて、疑問そうに言った。切り札を出すみたいに。  
『は？ なんでオレがお前の言うことを聞かないやいけ  
ないんだ？』  
『え――』  
『第一にオレはお前が好きじゃない』  
彼女はフンと鼻を鳴らす。  
『根暗で、陰気臭くて、問題に向き合う勇気もなくせ  
に、かといって死ぬ勇気もない。どうしてそんなにネガ  
ティブなんだ？ なぜ世界をすぐ切り捨てようとする？  
大体、なんで他人の視線を恐れているんだ？』  
ノータが辛気臭そうに頭を左右に振る。その度に光が  
白髪の輪郭を際立たせる。  
『いや、答えなくていい。知りたくもない。第二に、オ  
レはお前の子分でも部下でもない。お前のことなんてど  
うでもいい！ オレの人生を生きるのに必死だからな。  
一秒だつてお前のために割いてやるもんか』  
ノータは腰に手を当て、堂々と言い張る。その夜空す  
ら射抜かんばかりの鋭い双眸の奥に、迷いは一切無かつ  
た。  
『生きるのが辛い？ 人生が苦しい？ んなことは知ら  
ねえ。死にたいか。なら勝手に死ねばいい』  
その端正で柔らかい唇から熱い空気の塊を吐き出すと、  
ノータは顔を閉じ深呼吸をした。そしてカッと見開くと、  
その瞳には意志のほむらがギラついていた。  
『だがオレは生きたい！ 新世界を満喫したい！ だか  
らお前が百回死のうとしても、オレは百回とも生き延び  
てやる！ 生きて生きて、生き抜いてやる！ 選んだ星

と相手が悪かったな！ せいぜいオレに振り回されろ！

『いや、そもそも選んで来たわけじゃ——』

『うるせえ、ごちゃごちゃ言うな！』

走った後みたいに、ノータの胸は上下していた。そうして呼吸を整えると、アンブロシウスを見下し、乾いた唇を引き結ぶ。

『お前が死にたいと思おうが、思うまいがどうでもいいけど、絶対に死なせない。だってまだ回路同期してないし！』

『は——？』

『よく聞け、オレは心の底から嫌なことが三つある！  
一つは王族。次に弱い物いじめ。最後に空腹だ。召喚魔法を使った夜から一度も星気を供給できてない！ さっさとこの状況から抜け出して、大人しくオレに抱かれる！』

『ええ……』

唇を真一文字に結んで、いたって真面目な様子のノータを見ながら、アンブロシウスはややあつけに取られた口元を徐々に開いていくと、諦めたようにフツ、と笑った。

『お前、ずっとそのために行動してたのか？』

『そっただけど……何か？』

『もついいよ、好きにすればいい。今まで深刻に悩んだ僕がバカみたいじゃないか』

アンブロシウスは口端に自嘲をのせた。

ノータは凍り付いたように固まった彼の唇から、力強く空気の塊を吸い込んだ。手すりを掴み、足では床を掴み勢いよく立ち上る。

驚きを隠せず、片眉を上げている老人に向かってノー

タ恭しく話をはじめた。

「ごきげんよう。セナートウスの御仁」

セナートウス。これが老人の綽名だと、各魔術師がロブにつけている文字盤からノータは判断した。

「私から提案があるのですが、宜しいでしょうか？」

ノータは礼儀正しく片膝をつき、右脇で両手を組んだ。その儀礼に満足したのか、セナートウスは発言を許可する。

「学園から出ない、加えてそちら側の計画に私を使ってもよい。という条件の下、猶予を頂けないでしょうか？  
学園生活の中で、少しでも脅威とそちらが判断すれば殺してくださいと構わない。つまり、あなた達の監視を甘んじて受け入れるということですよ」

アンブロシウス（ノータ）の玲瓏とした声が響く。

『君でもそんなに譲歩するんだね。僕と話す時もこれぐらいのスタンスでいて欲しいんだけど……』

何か高等な交渉術を見た気分になる。ノータは当たり前のように彼の言葉を無視する。

『さっきも言ったが、死ぬつもりは毛頭ない。……ここまで言わないと彼らは安心しないだろうからな』

セナートウスは思案顔で顎をさすりながら言う。

「計画のう……。お前がどこでそのことを知ったのか詮索はしないが」

そこまで言いかけて老人の薄い頬が震えはじめ、頬が強張った。握っている封筒がクシャリと音を立てる。

「ワシはあの計画が憎い。初孫を奪ったあの計画が。学長は一体何を考えておるやら……」

前言撤回、どうやら地雷を踏んだようだ。

「駄目だ。認められん。判決も公文書も取り消しはせん。」

それにお前は怪しすぎる。計画に加わる者なら学園生活は送れぬはずじゃが……？ お前の私欲が透けて見えたぞ。益々信用できん」

『チツ……そうなのか!! 師匠はそんなことまで教えてくれなかった……』

「たとえ魔法を使えるとしても、お前からの協力はいらん。貴様のような浮浪者に頼るほどの学園も落ちぶれてはいない。よって判決は変わらぬ。無駄だ。」

「そうですか。残念です……」

アンブロシウスの威勢が萎み、椅子に座るかと思いきや突然、不気味な笑みで上品にお辞儀をし、絞り出すように声をこぼした。

「であれば、ここで全員殺してみせましょう」

## 九、

そうして掌を地面に向けると、身体を軽く構えた。彼の周りがほんのりと光り、魔力が集まり始める。アンブロシウスの意志を感じ取ったのか魔術師達も戦闘態勢になる。相手方の数はざっと五十人。初学者ならいざしらず、そのどれもが唯の魔術師ではない。服装は緋や滄の

ローブ。この着用品が認められるのは若魔術師ユングマジスター以上である。

加えて紫のローブも何人かいる。彼らは名譽魔術師オーバーマジスターと呼ばれる。魔術師五階級の最高位にして、この学園の幹部たちである。

『ちょっと、まずいんじゃない?? さすがに数が多いんじゃない—』

『うるせえ、ちょっと相手するだけだ。オレを誰だと思つてやがる』

ノータが二の句を継げない口調で言う。強く言い放つたが、両手が細かく震えているのをアンブロシウスは感じ取った。

『いや、ていうか、本当に誰なんですか?』

両者ともに拮抗状態。睨み合いが続く。相手は一人。それでも魔術師たちは汗鬨に動けなかった。正体が分からないのも怖い、なにより仮に本当に魔法が使えるとしたら、勝ち目はほぼない。薄暗い場内で、アンブロシウスの不気味さだけが圧倒的な質量を持っていた。

それでも場の支配権を得るために、紫の魔術師が杖を

構えた。距離およそ十メートル。ノータが気配に気づき、体向けのさなかにも、見る見る杖先の円に星気が溜まる。ノータと目線が交わる。魔術師の表情は徐々に嫌悪の色を強める。その佇まいはアンブロシウスが動き出す前に、杖を打ち込むことを選び取ったオーバーマジスターのものであった。杖先が僅かに動く。

と、その時。

「いやあ、驚いた。本当に触媒を使わないんだね!」

セナートウスの背後にある暗闇の廊下から声だけが聞こえた。優しい声質であるが、声色は好奇心に満ちている。足音は次第に大きくなり、ゆつくりと光に身を晒しはじめた。シルエットが少し浮き出たが、紫ローブの溝や堀の深い顔には依然闇が溜まっており、青黒いグラデーシオンを身に被っている。

「ごめん、ごめん。月の民掃討の疲れがまだ残ってたみたいで遅れちゃった。久しぶりにちよつと前線に出ただけなんだけどなあ」

アルミラ球儀の光が男の全身を捉える。ゆらり、ゆらり。男がゆつくり歩くたびに紫のローブと長い黒髪が柔和に揺れる。年のころ三十程。右肩にはカラス、左肩には鼻が止まっている。現代風の優男だとアンブロシウスは思ったが、一度会ったら忘れることのできない妙な存在感があった。以前、どこかで会っただろうか。

男はセナートウスの後ろまで来ると、背もたれに両腕を組んで乗せて、前屈みになった。男のゆつたりした、自信に満ちた言動がこの場を支配し、戦闘の空気ではなくなっていた。魔術師たちは苛立たしそくに席に戻り、

その男を睨みつけている。どうやら嫌われているようだ。膨れ上がる嫌忌が場内に浸透する。

その時、傍聴席の端で一人が囁くのをアンブロシウスは聞いた。その声色は、自分の獲物が横取りされたことを不満に思う時のそれであった。

「なにがちよつとだ。一人であれだけ殺しておいてよく言う……」

「ん? 誰か、何か言ったかい?」

男が覇気のない声で言う。天蓋に向かつて上品に伸びた男の上睫毛がゆつくり上下し、辺りを抑えるように見回す。瞳の奥には底知れない深みが感じられた。んん、と口元に拳を当て咳払いすると、少し大きな声で話し始める。

「ここは一旦仕切り直しを。初めまして、青年。私はブルクルステス。この学園の長で、みんなからは鼻の学長オールドノーズなんて呼ばれてる」

学長はアンブロシウスに微笑みかける。すると、大きなため息をついて饒舌に語りはじめた。

「ここに来る時に話が聞こえたんだけど、相変わらずひどいねえ、この老人は。まったくこれだからお頭の弱い老人が上にいると困る。いや、年を取ると頭が弱くなるのかな。いっそ老人に冷たい学園運営ができればなあ……。老いぼれの考えは分かっているよ。どうせ不確定要素が多いからって死刑にするんだろ。短絡的だ。私は青年の見方だ。不確定で結構!むしろ可能性だよ、それは」  
今度はセナートウスに微笑みかける。怒り顔になり不敬で鼻を鳴らすセナートウスに対して、学長は顎に手を当て、笑みを深めることで応じる。

「どうして年を取るとこころも臆病になるんだろうね。あ



あはなりたくないね。私も気を付けよう」

学長はセナートウスの横に座り、頬杖を付くと、親指を突き出しつつくようにセナートウスを指す。

「そうやって生徒の嫌な面だけ見てさあ、ジクジク責めて矯正するんだろ」

するとセナートウスは物凄く剣幕でまくし立てた。

「教育の何たるかも知らない愚か者がめが。貴様は彼らに自由を与えてやっているつもりだろうが、それは混沌だぞ。秩序なくして自由ばかり与えてはいかん。この学園創設以来、貴様ほど罪深い男はおるまい」

「小さい頃から変に一貫性を持たせて、大人びた子供を作る方がよっぽど罪だ。もつと生徒の良い面も見てあげなさいや伸びないよ。あなた人気ないでしょう、先生？」

堪忍袋の緒が切れたのか隣で騒ぎ立てるセナートウスを横目に、学長は右耳を塞ぎながら手元の資料を見た。

「へえ、君アンブロシウスって言うんだ。いい名前だね。」

梟、アンブロシウスを参照して」

そう言った途端、梟が翼を広げる。低く、知性に満ちた声で話をはじめ。

「ほうほう、アンブロシウスですか。ふむ。うーむ。それは、なかなか」梟は翼を丸めたり、伸ばしたりして忙しなく言う。考え深げに頭部をくねらせる。一語一語味わっているように見えた。

「示唆に富んだ名前だ。語源は古代ドゥイン語の『不死』。または『復活』。派生形多数。アナスタシオス。なお女性形はアナスタシア、略称ステイシー。他にはアナスタシス。そしてアンブロシシア。語義も豊富。『不死の実』。そして『神の食べ物』。それに『螺旋の相を見た者』。そして『墳墓』。そして『復活の時』。無理やりつなげるなら

『生命』とも。そして魔法使いの祖と同名。ああ、ヴァイ・ヴァスヴァットじやない方ね。後世の同名と区別して大アンブロシウスとも言う。うむ。実に良い名前だ。この星で過ごすにはピッタリの名前だ。最上だ。名前が同じなら顛末も似通う、つまり——」

梟が続けざまに言いかけたその時。

「その鼻を黙らせるよ。まったく……うるさくてかなわん！」

「チェツ。良い所だったのになあ」

学長が口を尖らせて言う。そうして綻んでいた顔を徐々に引き締めると、組んだ手に顎を乗せ、アンブロシウスの体躯を真正面から見据えて、改まった様子で言った。

「アンブロシウス君は、この学園に入りたい？」

「どうだろう、僕は——、と思った時、ノータが喋り出した。」

「はい！ この学園で過ごして、どんな所なのか判断したいと思っています！」

「ハハハ！ 判断か。いいね、面白い理由だ。うん。君の入学を認めるよ」

学長は眉尻を垂らし、口端を上げて微笑んだ。そしてクルッと踵を返すと、先ほど出てきたあの暗い廊下に去っていった。長く、下で束ねられた黒髪は、彼の動きに合わせてさらりと揺れる。彼の姿が見えなくなる直前、セナートウスが眉間に皺を寄せて言った。

「そうやってまた生徒を利用し、危険に晒すのか？ お前の計画なんかのために……」

学長はこちらを見ずにただ手を振る。

「そんな大層な話じゃないだろ。教育方針の違いだよ」

学長の足音が聞こえなくなると、周りの魔術師たちも

ぞろぞろと慣れた様子で奥の出口から出ていった。また茶番を見せられた、という表情が顔に浮かんでいる。彼らにとっては日常茶飯事なのだろう。

『おい、やったぞ！ 遂に学園に入れるんだ』

ノータが鼻息を荒くして、嬉しそうにポーズを取っている。その姿は元氣いっぱいの子猫のようだ。彼女が動くたびに、耳の青色星のイヤリングが映える。

『そんなここに来たかったの？』

『ああ、師匠から話を聞いてな。いいと思ってたんだ』

それに……、とノータは少し下を見て言う。薄い臉はピクリと震え、瞳にはどこか含みのある色がにじんでいた。

『やっとな手に入れた新世界だから……』

借りてきた猫のようにしゅんとしたノータに驚いたが、アンブロシウスはそれ以上追求しなかった。彼は、めんどくさい過去や複雑な事情を察知することに長けているのだ。今ここで地雷を踏んだり、修羅場を呼び寄せたりしたら、このささやかな平穏が台無しになるだけ。そういうことが分かる程度には、前世の経験があった。だから直接、ノータに聞くのは得策ではない。それでも、彼女の正体を知りたいという思いを度々持っている自分に

気が付き、アンブロシウスは目標を立てた。星気についてこの学園で勉強して、こっそりノータの心を覗き見ようという目標を。

『ぼ、僕も、この学園で勉強しようかな』

不自然に歪んだ口元は、おそらく笑顔を作ろうとして失敗した跡だった。ノータはそれを意に介さず、軽い足取りでアンブロシウスの隣に来て座った。

『そうか！ お前もそう思うか！』

そう言うて荒っぽく背中を叩くので、彼はむせた。背中に彼女の手形が熱く残る。彼女なりの共感の表現なのだろう。分かりやすい女だと思った。

『じゃあ、僕たち一緒に勉——』

『え、なんで。やだ。オレ、お前のこと嫌いだし』

『う……』

前言撤回。掴みどころのない女だ。そう、依然、彼女の正体は分からない。アンブロシウスにとって敵か味方かも分からない存在。彼女と過ごすなかで、辛い思いをするかもしれない。まったく傷つかない、ということはある得ないだろう。それでも、もう少し生きてみようと思った。彼女の辿る道筋を、見てみたいと思えた。

『……ありがとう』

『なんだ急に』

ノータは面映ゆそうに頬をかく。

『いや、ただ言うておきたくて』

『あつそ……じゃあ言うな』

そう言うて彼女は隣に座ったまま顔だけ隠すように背けた。横顔を隠す帳のような白髪、その間から見える耳殻はほんのりと赤かった。

こうして、やや心臓に悪い入学式を終えた時、あの鼻が暗い廊下から飛んで来た。

## 十、

鼻は空中に留まりながら、ホーホー、と鳴いている。

それを何かの合図だと見て取ったのか、椅子から恐る恐る立ち上がると、アンブロシウスは傍聴席の間を慎重に歩き、鼻に付いていった。

「ねえ、どこに行こうとしているの？」

鼻は答えない。アンブロシウスは仕方なく、鼻に導かれながら暗い廊下を歩く。真つすぐ遠くを見つめるアンブロシウスに、等間隔に並んだ燭台が光を投げかけ、じめつと湿った足元や、苔や傷だらけの黒い石壁を照らし出す。廊下先の出口にふと目を向けると、宇宙が透けて見えそうなほどに青い空が、薄い光の筋を投げて寄っている。まだ星々が退場しあぐねている、曙であった。石段を登り出口に着くと、眼前に見渡せる広場越しに、彼らは巨大な建造物を見上げた。首の後ろを手で支えながら、空に届きそうな塔を仰ぎ見る。その塔は複数あるよう、凸凹の胸壁と鎧窓のついた重々しい棟のような建物が緩やかに弧を描きその間を埋めている。アンブロシウスは吸い寄せられるように左に視線を移しながら、自身を囲むいくつかの塔を見上げてやつと一周しそうになったその時、飛竜が中腹に突き刺さった崩れかけの塔が視界に入った。

（あ……。確かノータが壊した塔だ。あそこにはなるべく行きたくないな。なんか申し訳ないし……。）

とんがり帽子のような塔の屋根を、その下にある一人入れそうな右の窓が目深に被っている。屋根の下からは上品な色の旗が斜めに突き出ており、時折吹く涼しい朝の風に布をなびかせている。アンブロシウスは塔を凝

視する。塔壁には無秩序に取り付けられたいくつもの突き出し燭台。上から下までまっすぐ並んだ石壁からは、内部の螺旋階段が少し覗ける。

うわああああああ、とノータが歓声を上げる。

目の前の建築物は、星気を増幅する多大な工夫と努力の産物であった。アンブロシウスの目を借りてノータは、周りに円を描くようにそびえる十二本の塔を見た後、その間にある弧を描く棟に目を向け、特に円形の鎧窓を感じた様子で眺める。この学園は、全体で大きな円になっているんだ、と自身の脳内で描いた図面からノータは判断した。

学園の建築を見て興奮を隠せない彼らの視界を、あの鼻が横切る。その飛んで行つた先で、長身、長髪の紫ロ―ブを纏った男の肩に止まった。学長は、左肩で羽の手入れをする鼻を一瞥すると、右手の長槍をコツコツと広場に叩きつけながら、堂々とした緩慢さで広場を横切り、にこやかな笑みでアンブロシウスの前にやってくる。

「そうだ、言い忘れてたんだけどね、無闇に真名を教えない方がいいよ。今回はしょうがなかったけど、敵に知られたら大惨事だ」

「どうしてですか？」

「魔術は言葉と強く結びついてる。だから言葉をつかって存在に干渉することができる。あ、難しい顔してるね。要するに名前を使って人に悪戯できちゃうってことさ。だから普通、魔術師は偽名を使う」

「じゃあ僕も偽名を使いたいです。ていうか、この名前長くて言いづらいですよね」

首を手で押さえ、気弱そうに眉を下げながら俯くアン

プロシウスの前で、優しい塔のような男は手で顎をさすりながら悩んでいたが、やがて片眉を吊り上げて神妙に語った。

「ブロージョはどうだい？ 長さもちょうどいいし、これなら本名もバレないだろう」

「そうですね！ わざわざありがとうございます」

「さて、ブロージョ。これから君の組み分けをしなきゃいけない」

「組み分け？ 何ですかそれ」

学長は広場に向けて長槍を突き出すと、不思議そうに首を傾げるブロージョの横で、その茶色の瞳を閉じて詠唱を始めた。

槍にしては大きすぎる二等辺三角形の穂先はまっすぐに広場の中央を指し、穂の所々に空いた穴の円周を星気が高速で回転している。シュルシュルという音が今にも聞こえそうだった。

すると広場の中央にブロージョの背丈ほどある光球が突然現れ、場の空気がびり、と張りつめる。何か敵かなものを見ているような、神秘を体感しているような、そんな感覚だった。恐怖と興奮がないまぜになった表情をしているブロージョを横目に学長は言う。

「あの光球に手を触れてごらん。大丈夫、害はないよ」

本当ですか、と尋ねるようにブロージョは口をパクパク動かしていたが、唇をギュッと引き結ぶと、決心したように背筋を伸ばして歩き始めた。害はないと言われてもその光球は異様であった。宙に浮かぶ、人ひとり分の大きさはありそうな銀の球。それはテスラコイルの如く四方八方に光の筋をビリリと飛ばしており、ブロージョが近づくとつれてその威圧感が増していった。

人には当たらないから大丈夫だよ、と口に両手を添えて叫ぶ学長の方を見る余裕もなくブロージョは恐る恐る手を伸ばす。

手が触れたその時、お風呂のお湯のような優しい温かみを感じる。光球は胎動をはじめ、膨張と収縮を何回か繰り返して広場の空気を圧迫した後、やっと落ちて着いた。光球はブロージョの不健康そうな肌を温かい緑色で撫でながら、ブロージョから見て右斜め前に向かって柔らかい光の筋を伸ばしていた。その先には、あの飛竜が埋もれている塔があった。広場の中央で棒立ちになっているブロージョに学長が後ろから近づく。

「おっ、緑色か。君はなかなか才能があるよ。どの星と契約してるのか知りたいね」

「あの……この光の筋は何でしょうか？」

「ああ、これが示しているのは君の配属先だよ」  
(マジか……なんか気まずいなあ……)

学長は前髪をどかすように額をなぞる。その穏やかな唇が悪戯っぽく弧を描いた。

「金牛塔アヌ・グアンナ、触媒はカデューシアスの杖。君が今から過ごす場所だ。あそこで君は勉強をして一流の魔術師になるんだよ」

すると学長はぱつと顔を輝かせながらまくし立てた。

その茶色の瞳は興奮の炎を宿し、ブロージョの不安を焼き切らんばかりの光をみなぎらせていた。

「ようこそ！ ここは魔術都市ヴィーレン！ 魔法使いの祖ヴァイ・ヴァスヴァットの遺志を受け継ぐ魔術教育機関さ。魔法使いの祖なんて言われても分からないよね……じゃあ歴史の講義をはじめよう！」

そう言うのと俄かに先生のような口調で語り出した。

「始原より、魔法の源は円だった。指輪、腕輪、王冠、魂の輪郭……そして惑星そのもの。しかしはじめから不完全だったんだ、この惑星アルテローの円は。だから魔法を使えるようにするには外に頼るしかなかった。ゆえに二人の魔法使いの祖が外宇宙にパイプを求めるのは必然。ヴァイ・ヴァスヴァットは太陽と月に、ヨサファット・アンプロシウスはその他の恒星群に働きかけ、契約を結んだ。まあ、実際に魔力源の供給が安定してちゃんとした魔法が使えるようになるのは、ヴァスヴァットの弟子、つまり源流魔術師ナクシャトラとシユマウルスの時代なんだけども。そしてさらに時代が下ると魔法は廃れていき、下位互換である魔術だけが残った。それでも魔法があった頃の精神を引き継ごうとした二人の傑物がいた。それが太陽の衣ノイゲバウアーと月の王冠ダリウス二世。そしてこの学園はダリウス二世の系譜に属する。」

おっと、ヴィーレンの説明もしなきゃね。この学園都市の構成要素は三つ。中心の大聖堂。それを囲む十二の学生塔、ステーションさらにその二倍の円周上にある四つの塔、つまり

神秘、緋月、滄月、拝領の塔。君の配属先は十二のステーションの一つ、金牛塔さ。通称アル。正式名称はアヌ・グアンナ。普通は各塔で初級・中級・上級の勉強をするんだけど、君の場合は必要ないかもね。上級の勉強が終わったら大きく道は二つある。学園を出て世間を旅するか、さらに学問を究めるために進学するか。進学した者は三つの学問領域から一つを選んで探求に専念する。すなわち宇宙、星、円のいずれかの探求者になるんだよ」

水の中で呼吸するように息を荒げている学長の瞳は、ブロージョのしゅんと俯いた姿を見て、弾かれたように

見開かれる。

「どうしたの？ 元気少ないね？」

「学長……。僕怖いんです。ここで上手くやっていけるか」

前の……、と言いかけてブロージョは口をつぐむ。転移のことはあまり言わない方がいい気がしたからだ。

「ここに来る前……僕は辛かったんです。人生が、世界の全てが。この苦しみは永遠に続くもので、もうどうにもできない程に追い詰められていると思ってたんです」

苦しみは循環する。同じ苦しみがずっと続く。これがブロージョの哲理であった。

「そうしてここにやって来て、やり直せると思った！解放されたと思っただけです。違う世界なら真つ当に過ごせると思ってた……でも……結局僕は……僕が僕である限り苦しみ続けるんだって分かりました。もう辛い思いは嫌なんです！ だから……。ここでまた問題が起こったらどうすればいいのか分からない……」

ここまで正直に気持ちを打ち明けたことなど無かった。それは周りの大人に、家族にどうせ分かって貰えないと決めつけていたから。でも学長なら……。

学長の慈愛の雰囲気にはだされて話すぎたことが照れくさいのか、ブロージョは気恥ずかしそうに眼を伏せた。心にへばりつく膿をかみ殺すようにきつく下唇を噛み、瞳の奥がわなわなと揺らいでいるのが分かった。

学長は片膝をついて長槍を石畳みに置くと、両手をブロージョの両肩にやさしく添えながら顔を正面に据えた。

「大丈夫さ！」

学長の瞳に迷いの色はない。

「あの時法廷で見た君の顔。私は忘れてないよ。あれは苦しみを知っている顔だ。君は人生の、世界の苦しみを

知っている。だから同じように苦しんでいる人の気持ち  
が分かるし、彼らの行動原理も分かるはずだ。もう、そ  
れだけで一廉ひとかどの人物だよ。無理に元気を出せなんて言わ

ない。ただこれだけは言っておきたい。君の世界に対す  
る認識は、そこら辺の生徒より優れている。それが君の  
強みだ。きつと魔法の力を高めてくれるはずさ」

学長の言葉には人を鼓舞し焦りを鎮める温かみがあつた。彼の澄んだ夜空のような雰囲気と、塔のような長身と相まって、ずつと学長の足元で庇護されたいと思つた。なにより胸に沁みた。学長なんていう偉い立場の人が、尊敬されて然るべき人がわざわざ気にかけてくれることが。はじめてブロージョは、自身が嫌っている弱い面を認めてくれる大人に出会えた。

「どうしても嫌なことがあれば私の部屋に来るといい」  
フードを目深に被り、去って行く学長。塔のような長身が、不気味な質量を伴っている。

この人どこかで……、とブロージョが思った時、学長が振り向く。

「そうか、あの塔を壊したのは君たち——」

突如、ノータは足にギン！と力が入るのを感じたのも束の間、勢いよく飛び跳ね、星気で作り出された短剣を逆手に持つと、学長の首元めがけて振り抜き、空中に真つすぐな光の軌跡を残した。